

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02573

研究課題名(和文) アイルランド語文献と居住空間から考察するアングロ・アイリッシュの文化的位置と貢献

研究課題名(英文) Cultural Position and Contribution of the Anglo-Irish Considered from Irish Texts and Living Spaces

研究代表者

谷川 冬二 (Tanigawa, Fuyuji)

甲南女子大学・国際学部・教授

研究者番号：50163621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：1916年の復活祭蜂起を最大の契機とし、それ以降も1966年の蜂起50周年まで、アイルランド島の南26県はカトリック教会とアイルランド語を重要視する政策を取ってきた。その根底にあるケルト民族主義が、いわゆる紛争を経験して見直され、対立すると見られてきたブリテン島からの移入文化の担い手もイングランドの宗教改革以前のSean-Ghallと以後のNua-Ghallとに大別されるようになる。

後者は長く被支配的立場の人々の怨嗟の的だったが、その私宅内の社会的空間であるdrawing roomがビクトリア期の新興カトリック中流層の住宅に継承された結果、そこが両者の生活様式共有と文化混交の場となりえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

異人とされてきたAnglo-IrishをSean-Ghall、Nua-Ghallとに二大別したこれまでの研究を継いで、プロテスタントである後者が社会的活動の基盤としたdrawing roomが、19世紀後半以降興隆するカトリックの下層中流市民の私宅に受け継がれて、両者の交流を可能にする共通の生活様式が育まれた、と考える。

時系列で歴史的にアイルランドの精神史を考えるのではなく、空間的共時的に、みな生活様式を同じくしていたのではないかと疑えば、近代アイルランドの知識人の意識に、これまで看過されてきた相似性を見出しうるのではないかと。通時的な国民史のこのような見直しは、わが国にも適用できるだろう。

研究成果の概要(英文)： From the Easter Rising in 1916 as the greatest impetus until the 50th anniversary of the Rising, the 26 southern counties of Ireland had taken a policy of emphasizing the Catholic Church and the Irish language. The Celtic nationalism underlaying it was reexamined after experiencing "the Troubles", and the Anglo-Irish culture by immigrants from Great Britain were roughly grouped into the two: Sean-Ghall coming before the Reformation of England and Nua-Ghall coming after it.

The political power of the latter had long been resented by dominated people, while, since the drawing room, a social space inside their private houses, had been inherited by the Victorian Catholic lower middle class homes, it has become a living cultural tradition in the whole Irish urban life. It could have been a place to share styles of communicating and to mix various cultural movements.

研究分野：アイルランド文学、英語文学

キーワード：Anglo-Irish Sean-Ghall Nua-Ghall the Irish language drawing room Irish Literary Revival William B. Yeats John M. Synge

1. 研究開始当初の背景

そもそも、アイルランド関連の研究者にアイルランド語に通じた研究者が少ないという事情がある。ヨーロッパ文化を記述してきた資料がラテン語に次いで多いとされているにもかかわらず。このため、学術研究に際しても、アイルランド語をめぐる民族主義(あるいは国民意識)の桎梏を逃れるのが困難である。

アイルランド語を真正のアイルランド人のしるしとする民族主義は分かりやすく批判しやすいが、植民地主義への対抗も植民地主義というシステムの一部であるという E. サイド(E. Said)の主張を借りれば、アイルランドの民族主義を抑えようとする連合王国にもそれは見られる。

典型的には、『ベオウルフ』であろう。スウェーデン南部の小王がデンマークで英雄となる物語が何故英文学の出発点なのか。同様の民族主義は、フランス人貴族リシャール・ダキテーヌ(Richard d'Aquitaine)がロビンフッドの主とされ喜ばれるなど民衆の無意識無自覚のレベルで広く長らく浸透している。フランス革命とナポレオン戦争を切り抜けて自信を深め、時間を遡行して形成される歴史意識が支配する自己中心の世界観。英語文献のみに頼る学術は、ほぼ必然的に、このような連合王国、端的にはイングランドの民族主義の影響を受ける。

京都アイルランド語研究会においてアイルランド語を学び、アイルランド語の書籍の中でも文化史的に特に重要なジェフリー・キーティング(アイルランド語名 Seathrún Céitinn)著『アイルランドの歴史』(*Foras Feasa ar Éirinn*)の主要部に目を通せたことは、僥倖であった。アイルランド、連合王国、双方の民族に関する"-ism"の衝突として 19 世紀の事象がより客観的に見えるようになったからである。

19 世紀は近現代アイルランドの形成期である。その時期にアングロ・アイリッシュが主体となって盛んであったアイルランド文芸復興という運動を、いっそう注意深く検討する必要はないか。それは、アイルランドを文化的に独立させるためのものと解説されることが多いが、はたしてそれだけか。興隆する連合王国の新たな国民意識が M. アーノルドのケルト文学論を生み出し、それに対する内なる異国と言うべきアイルランド側からの反駁が W. B. イェイツのケルト文学論となったことは間違いない。が、その基盤となったアイルランド語文学世界との接点や、その後世に対する影響について精査し、より大きな視野の中で、アイルランド文芸復興の現代的意義を再評価しなければならないのではないかと。原因も結果もひとつではありえない。

ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン(以後 UCD)の客員教授としてダブリンで過ごした一年間、民族主義の気味を帯びて物語化されたアイルランドから自由になるすべを模索しながら、ひたすら街を歩いているうちに、みなこの同じ空間を往来しているという当たり前の事実気付いた。人がたまる、すなわち高度に"social"な機能を持ちうる場所がいくつかあるようだ。歴史意識を離れ、空間主体にそれらを探る道があるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

前項 1. で示した状況下で、*Foras Feasa ar Éirinn* の解説をさらに推し進めるとともに、関連のアイルランド語文献を援用し、著者キーティングが説くアングロ・アイリッシュ(正確には Sean-Ghall すなわち Old English)のアイルランド文化史における位置付けを検討すると同時に、Nua-Ghall すなわち New English が支配するジョージア朝ダブリンの私的居住空間たる drawing room に着目する計画を立てた。この空間が持つ公的社会的機能が、アングロ・アイリッシュの文化的貢献の実相を知る鍵ではないかと予想したからである。

『アイルランドの歴史』と通常訳される *Foras Feasa ar Éirinn* は、直訳すれば「アイルランドに関する基礎知識」である。近現代の民族意識とは異なるものの、著者に「われわれ」の意識はある。それが Sean-Ghall であるが、これも直訳は「古いウェールズ人」である。ウェールズに居住し現地の王族と姻戚関係にあったノルマン系のフランス人貴族たちが、新たに主君となったアンリ・ダンジュー(Henri d'Anjou)に求められレンスター王の援軍としてアイルランドに渡った歴史的事実を反映するものであるが、それを Old English と言い換えるのは物語の特徴である始め - 中 - 終わりという構造の操作の結果であり、物語化の徴である。Nua-Ghall すなわち「新しいウェールズ人」が宗教改革以後のイングランド人入植者を指すことと照応させると、Sean-Ghall と Nua-Ghall を対比させる構図は、ブリテン島においてノルマン系のフランス人貴族がイングランド人と同化した事情を糊塗する物語の一端と考えなければ理解不能である。こうしたことはほんの一例にすぎない。二つの島それぞれの民族意識絡みの物語素を見落としていては、新旧のアングロ・アイリッシュの文化的特質と貢献を明らかにすることはとうてい不可能である。

キーティングは自分たち Sean-Ghall をどのような者と規定しているのか、新参の English をどう評価しているのか。彼が創る差異の物語の機微はどこに在るのか、それを後世の読者がどのように解し、利用したか。

Drawing room は田園地帯に建つ巨大な邸宅ビッグ・ハウスから 18 世紀ダブリンの繁栄を象徴する地上 4 階地下 1 階の豪華なタウンハウス、さらには 19 世紀後半に発展した市域南部の新開地に並ぶ地下 1 階地上 2 階程度の規模の住宅にまで共通する空間である。動線が家族の日常と切り離されていて、特別の機会にしか子供たちは入れない。大きなものはほぼ劇場ともなり得て、実際そのように使われている事例は、ダブリン、テンプルバーのニュー・シアターなどいくつも例がある。長きにわたって継承されてきて、種々多様な人々に利用されてきたこの空間の本質はいったい何か。祖形を辿ると、アングロ・アイリッシュとの関連を否定しがたい点は確かである。

アイルランドという場所において、異人がおのが神話を創出して排除の論理を克服してきた過程、近世以降で言うならば、植民地主義に抗するのにそれを超える論理を模索した過程を、時間意識を持つとただちに働きかけてくる物語化の力から自由な視点から記述してみたい。研究代表者の原点であるイエイツの再評価につながるであろうし、さらにその後現代アイルランドに至るまで「異人」が国家的ユニティの中に統合されていく様子を考察するヒントが得られるかもしれない。あるいは、わが国の近現代の始まり、維新前夜から帝国憲法制定の頃までを比較できるようになるかもしれない、と考えた。

3. 研究の方法

アイルランド語、英語、その他のテキストについては定本があり、基本的にそれを精読する。古い雑誌等でデジタル化がなされていないものは、ダブリンの図書館に読みに行く、あるいは写真を撮りに行く。具体的な行先として、アイルランド国立文書館(National Archive)やアイルランド国立図書館(NLI)、UCDあるいはトリニティ・カレッジ・ダブリン(TCD)の図書館、また、ベルファストの北アイルランド公文書館(PRONI)が想定される。

デジタル化されている資料としては、アイルランド国立文書館が公開している1911年の国勢調査の記録が、個々の住空間でいかに人々が生きていたかを最もリアルに伝える資料のひとつとして有益である。

建築物に関しては、アイルランド建築文庫(Irish Architectural Archive /Cartlann Ailtireachta na hÉireann)を利用することが多い。アイルランド国内のそれぞれの街の過去を建物中心に知るときに不可欠の機関である。そのウェブサイトが提供している建築事典も非常に役に立つ。

ただし、drawing roomの本質を知るうえで非常に重要な間取りは一般的に入手しがたい。何世代も使い続ける石の建物の図面は、防犯上の用心から言っても明かさないのである。そこで、IAAと並んでよく用いたのがオンラインの不動産広告である。必ずしも正確ではないが、間取りが載せられないことはない。IAAのウェブサイトと照合すると、年代、地域と代表的な間取りが把握できる。その他、ホテルやミュージアムとして転用された建物には実際に訪れる、できれば写真を撮るといった方法をとった。

4. 研究成果

2017年、シンガポールでの発表において、仮説を展開した。Drawing roomの特質を動線から説き起こし、アイルランド文芸復興の中心人物の一人でアイルランド側からケルト文学論を著した詩人イエイツがこの空間で実質的に表現者さらにはプロデューサーとしての教育を受けたことを示し、その作品を証拠として挙げた。要点のひとつはdrawing roomが演じること、顔を作ることを求める空間であるという点である。彼の妖精の記述の仕方や能様式の創作を、この空間との関係で論じた。彼が、New Englishの家系であることを考慮すれば、これは、巨視的には、アングロ・アイリッシュのアイルランドへの同化過程の研究の一部である。

2018年、海外へ発表に行かなかったかわりに、来日したマイケル・ロングリー(Michael Longley)、エドナ・ロングリー(Edna Longley)夫妻やデクラン・カイバード(Declan Kiberd)教授と日本国内で長く話す機会を得た。アイルランドにおいて創作や批評界をリードしてきたこの人たちと自然体で言葉を交わす機会を得て、彼ら「北アイルランド紛争」(the Troubles)を知る世代が、理論の根底において感覚に触れることが出来た。「戦争」が絵空事でない彼らにとって、本人が意識しているか否かを問わず、批評の動向を決める原理はただひとつ、ほぼ必然的に、多様性の認知と緩やかな文化的統合へ向かう視点を求めることである。「異人」たちの融和統合の過程を詳らかにする、という本研究の方向性に自信を深めることができた。

そのカイバード教授とともに参加した早稲田大学におけるシンポジウムでは、シンガポールでの発表と力点を換え、アイルランド島の神話的歴史が侵入者の波を記して始まること、また、drawing roomの劇場としての性質を強調した。研究協力者の平繁佳織氏は喫煙を愉しむという人の寄り方について考察を述べられ、カイバード教授もそれに付言され、空間に着目する研究の可能性を示された。シンポジウムの副題自体、主宰者である坂内太教授が空間からのアプローチという研究代表者の発案に賛同されて名付けられたものである。このシンポジウムでの学術的な収穫は、drawing roomに着目するならば、人々がそこをどのように活用してきたかをつぶさに検証することが次の課題だと明確になったことである。すでにUCDの附属図書館の司書から同様の示唆を受けており、この年度の終わりにTCDの図書館でイエイツが関わった*Dublin University Review*を中心に photocopyを取る作業に時間を費やすことになる。

2018年度の後半は、日本アイルランド協会のシンポジウムを準備する過程で、キーティングからイエイツ、そしてそれ以降のポスト・コロニアル時代まで、「異人」とされたアングロ・アイリッシュがアイルランド島に土着化していく過程を改めて検討することに費やした。他のパネリストがいずれもアングロ・アイリッシュの著述家を取り上げて論じており、その文化的系譜を知るうえで非常に参考になった。

2019年には、TCDにおいて開催された国際アイルランド文学協会(International Association for the Study of Irish Literatures)の大会で、研究協力者をお願いした若い学究二人とともにA Spatial Approach to Irish Literary Studiesという題目のもとパネルを開き得た。いずれもダブリンの居住空間あるいはそこで展開されたクラブ文化に関心を抱いており、当該の研究に有益な知見の交換ができた。しかし、何よりも、パネルの司会を

務めていただいたクリス・モラシュ(Chris Morash)教授、前TCD副総長の好意的な反応を得られたことが励みになった。再会したカイバード教授からも同様の好意的な評価をいただいた。

3年間の成果に未発表の知見も含めるなら、まず *Foras Feasa ar Éirinn* については、マンスターの北部、トーモンドから出てアイルランド全土の支配者となったブライアン・ボルー(Brian Boru)とその一族がその立場に就く正当性を、彼らの Virtus 力、覇気においている点を指摘しておきたい。古代ローマの美德によって正統性が証明されうるならば、リシャルド・ダキテーヌの父アンリ・ダンジューの正当性の前例となしえ、つまりは、その旗下の者 Sean-Ghall の末裔としてのキーティングの地位を確保できるからである。さらにそれは、新参の Nua-Ghall との差異を説く基になり得る。アイルランド語に関心を持つ仲間が多くなく、中でキーティングに関心を持つ者は少なく、歴史的題材の物語的表現からこのような筆者の意図を汲み取る者となるとさらに少なくなつて心細い。しかし、この書物が 19 世紀に、アイルランド語学者ジョン・オマホニー(John O'Mahoney)によって英語に訳されたことを考え合わせると、この物語的歴史が与えられている結構の重さは、ぜひ理解されなければならない。オマホニーがアメリカにおいてアイルランドの共和主義組織と共闘するフィニアン兄弟団を創設した一人でもあり、アメリカの南北戦争で名を挙げたアイルランド人部隊の指揮官でもあったからである。

時間軸に拠る物語(histoire)を通時的に考察する従来型のテキスト研究に、空間を重視して共時的に考察する方法を取り入れてみたところ、Sean-Ghall、Nua-Ghall をはじめ多種多様な人々の混交の場となり「アイルランド」を生み出してきた場所が dawing room をはじめ確かに幾種類も存在する、と知れた。今後は、そのような場において混交が実際どのようになされてきたのか、特にアイルランドのクラブ文化の実相が、精査されなければならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 谷川冬二 Fuyuji, Tanigawa	4. 巻 48
2. 論文標題 復活祭蜂起100周年とコモレレイションの作法 1916/2016 and the Manners of Commemoration	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 イエイツ研究 Yeats Studies	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 谷川冬二 Fuyuji Tanigawa
2. 発表標題 W. B. Yeats ' s Poetics and Drawing Room Culture
3. 学会等名 IASIL Conference 2019: The Critical Ground (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷川冬二
2. 発表標題 シンポジウム「アイルランドの再創成」提題
3. 学会等名 日本アイルランド協会学術部 2018年度第26回アイルランド研究年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷川冬二
2. 発表標題 イエイツとdrawing room 文化
3. 学会等名 早稲田大学文学学術院表象メディア論系 シンポジウム：Inventing Ireland and After: A Spatial Approach to Irish Stories
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷川冬二 Fuyuji, Tanigawa
2. 発表標題 The Legacy of a Hyphenated Irish: A Drawing Room as W. B. Yeats ' s Cradle
3. 学会等名 IASIL Conference 2017: Ireland's Writers in the 21st Century (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小野瀬 宗一郎 (ONOSE Soichiro)	東京大学・教養学部・助教	
研究協力者	平繁 佳織 (Hirashige Kaori)	中央大学・経済学部・助教	